

〈マルサス型結婚〉が 歴史事実であるとマズイか？

MacFarlane, *Marriage and Love in England.*

Chapter 11

鈴木繁夫
名古屋大学国際言語文化研究科

結婚の身分法則

- 結婚へと踏み切らせる決断は、親族が握っている。
- 親族の基本構造(レヴィ=ストロース)
- 結婚可能な相手と禁忌の相手との区別
- ●社会集団における家族のあいだの「親密さ／疎遠さ」の関係を調査し、家族集団は、必ずどちらかの選択肢を選ぶという発見。
- 父—子／伯叔父—甥の場合
 - (0)父と息子は親密だが、甥と母方のおじさんは疎遠である。
 - (1)甥と母方のおじさんは親密だが、父と息子は疎遠である。*14
- 夫—婦／兄弟—姉妹の場合
 - (0)夫と妻は親密だが、妻とその兄弟は疎遠である。
 - (1)妻はその兄弟と親密だが、夫婦は疎遠である。
- 4項(兄弟、姉妹、父親、息子)からなる親族の基本構造は、二つの二項対立から成る。
- 「この構造は考える限り、存在しうる限り最も単純な親族構造である。まさしくこれが親族の基本単位なのである。親族構造が存在するためには、人間社会につねに存在する三種類の家族関係—共通の父を持つ関係、婚姻関係、生んだものと生まれたものの関係—言い換えれば、兄弟姉妹、夫婦、親子—がそこに含まれていなければならない。」(『構造人類学』)

親族構造下にある結婚の特徴

- 生物的制約をもっとも受ける。→女性は初潮後に結婚
- 経済的制約には敏感に反応しない。
- 結婚する当人の心理は考慮されない。

- 親族構造下では、結婚に好ましい相手と結婚できない相手とを区別する用語があり、個人にその用語を変える選択権はない。
- 結果として、村落の場合には強固な血縁関係ができた。

- カトリック教会ではラテラノ公会議(1215年)で4等親内の結婚は不可とされる。

地域・階層をまたいだ結婚

- イングランドでは、ごく近親のものを除いて誰とでも結婚できた。
- イトコ婚First cousinすらも可能であった。

- イングランドでは、住民の移転や階層移動が多くなった16-17世紀から親族間結婚から脱却していった。
- これはヨーロッパ階級社会に較べると驚異的事象。

- ジェントリーがヨーマンと結婚する。
- 「ロンドンの流れる黄金を青い血に輸血する」

- 近くに住んでいるもの同士の結婚が少ない



イギリスの身分制度

貴族	公爵 duke (デューク)	
	侯爵 marquis (マーキス)	
	伯爵 earl (アール)	
	子爵 vice count (ヴァイス カウント)	
	男爵 baron (バロン)	
準貴族	準男爵 baronet (バロネット)	
	士爵 knight (ナイト)	
準々貴族	ジェントリー gentry	} 平民 (庶民)
準々々貴族	ヨーマン yeomanry	

※フランスの身分制度は割合にイギリスに近い。
ドイツの貴族制はあまりに複雑である。